



私を助けてくれた紙

杏

小さい頃から、絵を描くのが好きだった。祖父が勤め先で不要になった紙を持ち帰ってきてくれるのが、楽しみだった。

何の為の紙だったのかはわからないけれど、薄手の材質で、ちらほらと数字がちらばっただけのものだったと思う。その裏に、好きだったカメラや、色々な色の丸を描き並べたり、女の子の絵を描いてみたり。腕白だった兄とは対照的に、紙と鉛筆さえあればとてあえず静かになにかを書いている子供だったようだ。

小学校では、学校の方針で三百六十五日毎日日記を書かされた。挿絵を入れたり、出かけた先のチケットやパンフレットを貼ってみたり。日記は六年間で七十冊近くにもなった。

中学校になると、授業のノートをまとめるのが好きになった。プリントをノートに貼らなければいけない場合でも、文字は

全部書き写した。プリントの中の写真の部分だけを切り取ってノートに貼っていた。眠くなって字が乱れたら、書き直すこともあった。白いノートが文字で埋まっていたのが、なんだか気持ち良かった。

バイトで店番をする時、暇な時は白い紙に辞書を書き写していた。「髪形」とか「色の名前」とかテーマを決めて、その項目を次々と写す。髪形というテーマだけでも、少しめくればそれに関連する言葉が次々と出てくるのが面白かった。

モデルを始めてからは、毎日違う現場異なるメンバーで仕事をしていくので、手帳をつけるようになった。誰と会ったか。どこへ行ったのか。薦めてもらった映画や本のタイトル。美味しそうなおレシピ。

女優の仕事が始めてからは、自分が言う台詞を全て一度、紙に書くようにしている。ミュージカルの舞台では、ノート二冊に、自分の台詞の他に、ト書きや他のキャラクターの台詞も全て書いてみた。全部書き写すまでに一カ月以上かかったが、一度書くだけで、ずっと理解が深まるような気がするし、書いてみて初めて、見落としていた部分に改めて気付かされることもあった。

手帳は今年で十年目、十冊になったが、自分の脳味噌がそのときそのまま詰まっているような気がする。忘れていたことで

も、手帳を開けば昨日のように思い出せる。

先日、インタビューで「あなたが仕事をしている上で、もっとも助けになっているものは何ですか？」と聞かれた。人やツールを挙げることも考えたが、とっさに「…紙…かな？」と答えた自分がいて、我ながらちょっと驚いた。

でも、そうだ、ずっと変わらず自分を助けてくれたのは、紙だったのだ。定義が広すぎるかもしれないけれど、紙はいつでも私を支えてくれた。手帳やメモは忘れっぽい私をサポートしてくれた。一人で寂しく感じる時には、本が時間を共に過ごしてくれた。

文明が進んでも、紙は消えないだろう。触って感じられる、紙の力を信じている。直接伝えられない「ありがとう」の言葉は、なるべく自分で書いた手紙で届けられるように心がけている。選んだ紙にじむインク、走る筆跡は二度と再現できない。そうして残る気持ちは、何よりも価値があるように思う。

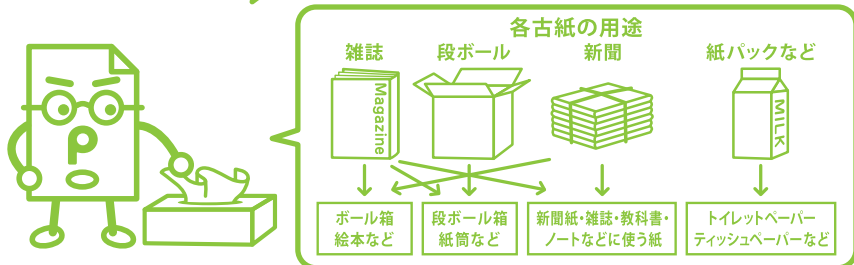


杏(あん) ●東京都生まれ。15歳からファッション雑誌のモデルを務め、国内外のコレクションでも活躍。2007年、TVドラマ『天国と地獄』で女優デビュー、映画をはじめ、多彩な役柄に挑戦中。昨年は念願のCDデビューも果たす。読書が好きなことからJ-WAVEでは「BOOK BAR」のナビゲーターも担当。現在、日本テレビ系列で放送中の土曜ドラマ「妖怪人間ベム」ではベム役を好演している。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

回収された紙、次は何になる？

段ボールはまた段ボールに。紙パックはティッシュやトイレトペーパーに。そうやって、一度使われた紙は回収されて、また新しい紙へと生まれ変わっていきます。あなたが毎日いろんな場面で使っている紙とも、またどこかで会えるかも。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

◆次回は12月1日号、武田双雲さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Shiro Miyake Styling : Nae Kondo